

八 信心の火ある處に

思ひ内にあれば色外に顯はるとは、能く云ふたものである。「云ふまいと思へど今日の暑さ哉」心にあることはすべて外にあらはるゝもので、心に添ふ形ほど正直なものはない。それに人は兎角上から塗りがるで困る。内から湧き出たのでなくては仕方がない。試に思へ、南洋の鰐が白い鶴の羽を被り北海の黒熊が孔雀の尾で身を飾つた事を。これが虚榮である偽善である。人物の價値といふものは、鶴の羽や孔雀の尾で左右せられるものでない。牛は牛、馬は馬としての、眞價を發揮すればよいではないか。何事も心の底から湧き出たのでなくては、眞物でなく價値もない。而も其の心は最もよく外に顯はれて、容易に人の知る所となるのである。佐藤一齋先生は云つた。

信を人に取るは難し、人は言を信ぜずして身を信ず、身を信ぜずして心を信ず、是を以て難し。

人は心を信ずるものにして、心は内にありて能く人に知らるものである。故に亦頼もしい邊がある。或人曰く

心ほど人のよく知るものはなし、恐ろしの世やたのもしの世や

足利八代の將軍義政公は、有名な北山の銀閣に居をかまへ、珠光といふ者を師として、茶の湯に懲り、天下に茶道を流行せしめただけに、酒は大嫌ひ。或る年洛中洛外に法令を出して、酒飲むことを禁じたことがある。然るに萬阿彌といふ寵臣、少し位飲みたりとて知らるゝこともあるまじと、横着にも一杯引掛けて御殿へ登つたところ、義政公は早くもそれと見認めて、「萬阿彌々々々」と聲を懸けたので、萬阿彌は恐るゝく「ハツ」と首を擡げた、義政公其顔を熟々見て、「飲酒は一切相成らんと云ふ掟に背いて、其顔は何ぢや」と云ふお咎め。萬阿彌も云ひ譯に差詰つて、「これは其の……只今まで焚火で寒

さを凌ぎ居りまして、急に出仕を致したので、斯う顔が赤くなりましたので御座ります」義政公もフツと失笑して、「世の中に眞赤な偽といふこともあるが、其方の事であらう。どれ焚火か酒か、嗅いでみれば解る、近くく」と云はれて、萬阿彌も據ろなく、御前近く進むと、義政公は鼻を差出して萬阿彌の息を嗅ぎ、「ヤア熟柿臭いぞ」との仰せ。萬阿彌はつと思つたが、ぬからぬ顔で、「それは其の筈でございます、柿の木を薪にして焚きました」何と云うても争はれぬ、酒の息が飲んだといふことを證明するから。

「信心治定の人は、誰によらず、先が見ればすなはち尊くなり候。是れその人たふとときにあらず、佛智をえらるゝがゆるなれば、いよく佛智のありがたきほどを存すべきことなり」『御一代聞書』とは喜ばしいではないか。佛智の光が、自ら外に顯れて、見る人に尊く嬉しく思はせるのである。而して徳は孤ならず必ず隣あり、必ず之と同様の人、同相の人を造るのである。「染香人のその身には、香氣あるが如くなり、之をすなはちなづけてぞ、香光莊嚴と申すなり」御信心の香氣は法界外にまで弘まることである。